

# 表と裏

佐藤正憲

暮になるとこの掛物をとり出すことが多  
い。箱には何も書いてないし、極めの札も入  
っていない。箱書をするなら九条家本延喜式  
紙背仮名消息とすべきである。九条家本延喜

延喜式の価値もさることながらこれら紙背文  
書も根本資料として注目されるところであ  
る。戦後間もなく伊東卓治氏らを世話役とし  
て催された名筆鑑賞会において、この中の数

の年号を持つ文書があつて、仮名消息の書か  
れた時代もほぼその前後ということがいわれ  
ている。架蔵の掛物はその仮名消息の一通が  
抜け出したものである。

式といえはたしか国宝か重要文化財になつて  
いたと思う。延喜式としては現存最古の写本  
として知られている。書写年代は明らかでな  
いが、平安後期のものであることがその筆蹟  
でわかる。九条家に伝えられたが昭和十六年  
国有に帰し、現在は東京国立博物館に保管さ  
れている。完本とは言えないが、延喜式の大  
部分が二十八の卷子本として残っている。使  
い捨ての古い文書・記録・消息のほごを継  
ぎ合せ、その裏面を使って延喜式を書写した  
ものである。紙背の文書のうち年号の見られ  
るものがあつて、宝亀から承暦までおよそ三  
百年にわたる期間のほごというのである。

巻が展示されることがあつたが、この時も会  
の目的はむしろ紙背を研究することに主眼が  
あつたように思う。紙背は薄紙で裏打ちされ  
ているのだが、透けて文字を読むことができ  
る。私自身は表の延喜式の方ももっとよく鑑  
賞したかつた。書道史の上からは、もっとも  
っと高く評価されねばならないという考えを  
もっていたからである。幹事の一人に、その  
ことを言うと、あの時代ではこの程度のもの  
はだれでも書いたのではないかと言つてとり  
あわなかつたことを今でも忘れない。紙背文  
書の中に仮名消息があるが、それは少なく、わ  
ずか三巻に見えるだけである。その中に長元

紙幅は縦二十九センチ、横四十五センチ。  
消息を表に出してあるから延喜式の方は裏に  
なつている。延喜式の墨が表にしみ出てい  
て、およそ拾い読みができる。得業士という  
語などあつて大学令の一部である。消息は中  
央より右寄りに書かれている。六行、流麗な  
筆蹟である。右にも左にも、左は特にたつぷ  
り余白があつて、短いながら完結した文章で  
ある。それは次のような行立てで書かれてい  
る。

あ可良佐まにいまの  
ほと尔まいら世多まへ  
あ那い世佐多ま

不へ支ことはへ

利天なむ

可那ら春く

「あからさまにいまのほどにまいらせたまへ。あないせさせたまふべきことはべりてなむ。かならずく」と読める。右釈文中、漢字で示したのは使用されている草仮名の字源である。これでわかるように、きわめて平易な仮名文字ばかりで、当時女手と呼ばれた姿をよく示している。墨の濃淡はあまり目立たない

が、「あからさま……」「まいらせ……」「ふへき……」「はへ……」で墨継ぎをしているようだ。

「はへ……」の墨継ぎは早いようだが、実は、いったん「……べきことなむ」と書いたのを「なむ」の上に重ねて「はへ」と書いて、書き直している。書き直すときに、墨をつけたようである。各字ほとんど切れめなしといつてよいほどの連続は、見事といつてよい。行末は大体そろっているが行頭は前掲の通り高低があつて、ちらしの形式をとっている。このちらしは素朴単純で嫌味がなく、寸松庵色紙に似ている。

「まいらせ」の仮名遣いは注目すべきであらう。「あないせさせたまふ」という最大級の敬語を使っているところから、この消息が

さる高貴のあたりの意向にもついで人を呼び出すためのものと知られる。枕草子にでも出てきそうな情景が思い浮べられる。筆者は男であろうか女であろうか。流麗ではあるが筆線はつよい。つよいからと言って男の手とはきめられまい。呼び出される人物は、これはどうしても女性としたい。こんなことを頭に描きながら楽しんでるのである。表装はあまり感服しないが、やり直すには相当かかるとであろう。急ぐ必要はない。

この掛物はちやうど今から二十年前、暮の古書入札会で手に入れたものである。戦後のどさくさも次第に落ちついてきて、古美術、骨董の類も値を上げてきた。もう我々の手には負えないとあきらめかけていた時期に、この掛物に偶然出あったのである。買うつもりで入ったわけでもない入札会に、西行上人消息として展示されている前を通りすぎようとして、裏の文字が目をついたのである。近くに寄つて熟視すると、まごうかたなき延喜式ではないか。鎌倉時代の仮名消息には、しばしば西行、文覚、頼朝などの名が冠せられる。大したものではないとこの道に通ずる人はかえって通り過ぎてしまふのではなからうか。

ここで欲が出た。業者に相談すると、ためし

に入れたらということで頼んで帰った。それが落ちたのである。大晦日家に持つてきて床に掛けた。昭和三十八年の正月はいい気分であつた。

ところで、博物館の九条家本延喜式を見ると欠落している筈のこの一紙が抜けていないのである。これにはびっくりした。わが家のものについての自信は少しもゆるがないが、館のその部分も補写などということはできない。全く同一人の手としか見られない。これは一体どういうことか。

この事について福田喜兵衛氏は「むいたのだ。表裏分離したのだ」と言われた。この種の紙がむけると考えられないと反論すると、必ずしも不可能ではないということだった。

そこで架蔵にパリン紙をあて、文字、虫喰い、破損など、できるだけ丁寧に写しとり、これを裏返して館本に重ねたらすべて一致したのには二度びっくりした。

なお、架蔵は幅に仕立てる際、右端を切り落したらしく、延喜式の一行分だけ短くなっていることもわかった。